

キャンパス・コラム

21世紀の多摩

新しい世紀の到来をあて込んださまざまなイベントが行われている。なかには、客を呼び込んで財布の紐を緩めさせることを意図しただけの企画も多い。GDPの6割を占める消費が拡大しないことには本格的な景気の回復が難しいのだから、うまくいってほしいという気にもなる。しかし一過性のお祭りとは違って新しい世紀の課題に立ち向かう試みとなれば話は別である。もちろん真っ白なキャンパスに絵を描くようなわけにはいかず、引きずってきた過去の冷静な分析を踏まえて新たな可能性を探り、そのうえで実現可能な課題の提示と取組みへの道筋をつける作業となると、考えるだけでも大変である。

その意味で、12月2日に多摩キャンパスのクレセントホールで開催された「大学サミット多摩2000」は、知的刺激と啓発を与えてくれる有

意義な催しであった。多摩にある28の大学と多摩ニュータウン学会が主催したシンポジウムは、「多摩は日本のシリコンバレーになれるか」、「学術・文化・産業のネットワーク多摩の形成をめざして」という2つのパネルディスカッションからなり、前者はベンチャービジネスの活躍する文化空間の形成に対する大学の役割を、後者は立川と八王子の市長を交えて大学と自治体・市民・産業間の協力体制をテーマとするものであった。

中央大学が多摩キャンパスに移転し、「地域に根差し世界に開かれた大学」を掲げて既に20年、やっとここまで来たかという想いを強くもったのはともかくとして、多摩の地が都心に通う人達のベッドタウンから産業と情報の先進地域に変貌を遂げるために、大学に期待されている役割の大きさを痛感される催しであった。

広報委員 角田 邦重（法学部教授）

ついに21世紀がやってきました。明けましておめでとうございます。ことしの年明けは、これまで経験したことのない期待と緊張の入り交じった一瞬だったのではないのでしょうか。▲この際、人生を年数でなく、日数で考えてみましょう。仮に皆さんが20歳とすると、この世に生まれてから7300日たったことになりま

す。そこで21世紀に入り、あと60年近く生きるとしましょう。すると約2万日です。▲100年に1度の世紀の変わり目。皆さんは歴史的にもすごく貴重な瞬間に居合わせているのです。激動の20世紀の証言台に立ち、20世紀をウオッチしていく。この事実を考えただけでも、いかに皆さんがラッキーな存在か分かります。▲地球人口は昨年、60億人に達しました。地球は有限なのです。その小さな惑星のなかで繰り返される戦争。そこから始まる悲劇……なんて愚かな行為でしょう。これを皆さんはしっかりと自覚し、後の世代に語り継いでいくことは、きわめて大切なことだと思えます。

（広報課）

編集後記

Hakumon
ちゅうおう

2001・1月号（第163号）

2001年（平成13年）1月1日発行

発行 中央大学広報委員会

〒192-0393 東京都八王子市東中野742-1

〈編集担当〉 広報課 ☎0426-74-2146

印刷 泰成印刷株式会社

〒130-0026 東京都墨田区両国3-1-12

電話 03-3631-8141